

菜の花文庫に行ってきました！

主宰者・山川喜美子さんに聞く



山口 真也



国道58号線沿い 67番土名線 大兼久下車徒歩1分

2010年6月、この『沖縄県図書館協会誌』の編集でもたいへんお世話になっている、地域児童文庫連絡協議会の山川喜美子さんから1枚の招待状を頂きました。

“菜の花文庫”へのおさそい

こんど、本とお話しを楽しむ、ちいさな、ちいさな文庫を始めます。

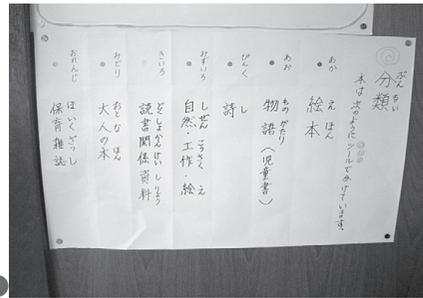
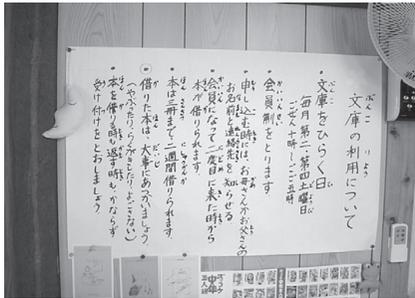
みなさん、あそびにきませんか！

(場所) 大宜味村字大兼久33番地

以前から、地域の個人文庫(家庭文庫)活動に興味があった私は、「夏休みに入ったら取材に行きますね」とお返事をしたのですが、実はその時点で私は大きな勘違いをしていたのです。それは文庫がある場所。私は以前から「大宜味村」と「宜野座村」を勘違いする変な癖があって、このときも、「大宜味なら高速バスで1時間もあれば行けるよね！」と思い込んでいたのです。しかし、大宜味村と宜野座村は同じ北部でも名護越えをするかしないかの大きな違いがあります。そういえば、「行きます」とお返事をしたときに、山川さんは何度も「遠いですよ？」と心配そうに仰っていました。取材の前日に地図をみて、なるほど、そういうことだったのか！と謎が解けたバカな私です。

さて、自家用車を持っていない私にとっては、大宜味村までの道のりはちょっとした小旅行です。鞆に夏休みに読むぞと思っていた文庫本を詰め込んで、水筒とおにぎりを持参して、路線バスを乗り継ぎ、片道3時間半の旅に出かけることにしました。まず宜野湾市の大謝名まで歩いて、大謝名から名護バスターミナルまで2時間ちょっと。名護の直前まではスムーズだったのですが、高速料金無料化の影響でしょうか、名護市街直前の高速道路の最終出口付近がものすごい渋滞で抜けるのに20分くらいかかってしまいました。その後、バスターミナルで20分ほど待って、大

「菜の花文庫」見取り図



こちら側の壁には利用方法、シールの分類方法が書いたポスターが。



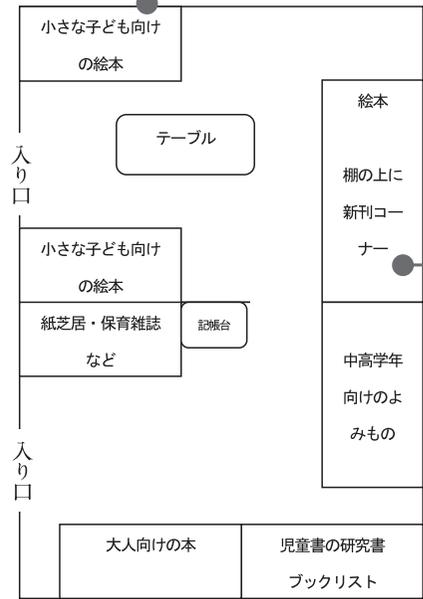
←入り口は2箇所
あって開放的な雰
囲気です。



←本棚上の空き
スペース(壁)には
本の表紙カバーが
飾られています。



←大人の本も。推
理小説、エッセイ、
実用書など多彩な
品揃えです。



宜味村行きのバスに乗り継ぎ、大兼久というバス停で降りると、菜の花文庫はもう目の前でした。バスに乗っている時間は長いのですが、歩く時間はそれほどではありません。

さて、前置きが長くなりましたが、ここからが本題の菜の花文庫のレポートです。菜の花文庫は、毎月2回、第2・第4土曜日午前10時から午後5時までオープンしています。主宰者であ

る山川さんのご主人の実家を改装して、2010年7月24日にオープンしました。山川さんの実家は数年前に改装されたそうですが、ご主人のお母様が嫁いでこられた時に最初に使っていた思い出のお部屋はそのまま手を付けずに「離れ」として残しておかれたそうです。菜の花文庫はその離れをリフォームして造られています。離れは12畳ほどのスペースがあって広さは十分ですが、元々台所やお風呂などが作りつけられていた間取りだったため、台所を取り払い、壁や天井を張り替え、サッシも新しく付け替え、扇風機やクーラーが取り付けられたりして、子どもたちがリラックスして読書を楽しめるような空間になっています。

文庫内は、入り口から入って手前の本棚から右回りに、小さい子どもの本(絵本)、中学年向けの読み物、児童書研究書、大人向けの本、紙芝居、布絵本、育児雑誌という順番に並べられています。本にはそれぞれ背の部分にシールが貼られていて、どの棚の本か子どもでも分かるように工夫されています。文庫にある本の多くは、山川さんが娘さんたちの子育ての中で買った本が中心で、他に那覇市の公共図書館の廃棄本の中かから山川さんが子どもたちに読ませたいと思った絵本などが一部含まれているそうです。「蔵書にちょっと偏りがありますけど

……」と山川さんはおっしゃっていましたが、個人が読んだ本や良いと思った本を広げていく活動にこそ、家庭文庫の醍醐味や楽しさがあるのだなあと思いました。菜の花文庫は「会員制」となっていて、初回

利用時に名前と連絡先、子どもの場合は保護者名を書いてもらえば、簡単に貸出ができるようになっています。貸出は3冊まで、次の文庫の開設日まで(2週間)が期限です。貸出の際には個人ごとに作られた貸出票にタイトルを書いて、読み終わった後に感想を○×で書けるようになっています。山川さんは、子どもが文庫にいる時はかならず室内で様子を見てあげるようにしているとのことで、貸出の他にも、子どもに絵本を読んであげたり、紙芝居を上演したりしているそうです。

意外な感じもしますが、長く地域文庫活動に関わってこられた山川さんにとって、菜の花文庫ははじめてご自身で主催した家庭文庫だそうです。山川さんは現在那覇に在住されていますが、那覇市ではなく、大宜味村のご実家の方に文庫をつくらうと思った理由を聞いてみることにしました。山川さんのお話では、大宜味村は北部の小さな自治体なので、公共図書館や書店が村内には1つありません。菜の花文庫の近くには公民館もあるのですが、図書室はなく、唯一の読書施設は学校の図書館だけなのだそうです。大人が日常的に読書を楽しむ施設はありませんし、子どもの本を知る機会も限られています。子どもたちは学校図書館で本を読めますが、土曜日は利用できませんし、読書環境は学校だけでなく、身近なところにたくさんあってほしいという思いもあるということでした。また、山川さんは小学校時代を北部で過ごしたため、北部の子どものために何かしたいという気持ちもあったそうです。今年は「国民読書年」ですが、読書というものは、こんなふうに地域の中で楽しく、優しい気持ちで、地道に広めていくものだなあと感

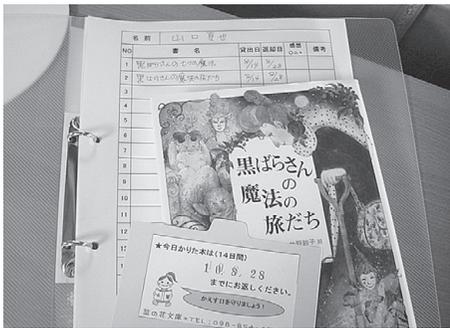
→文庫の蔵書には山川さんの娘さんがデザインされた菜の花文庫のマークが貼られています。かわいい!



じました。

ちなみに、私が取材に行った当日は、午前中は子どもたちでにぎわっていたようですが、午後は地域のお祭りがあって、私が文庫に到着した時刻は、子どもたちが帰ってしまった後でした。この誌面で、子どもたちが生き生きと文庫を使っている様子を紹介できなくて残念です。でも、山川さんとお話しをしていると、私自身が子どもの頃の気持ちに戻ってしまったような気がして、本棚にある本がどれもこれもキラキラと輝き出してくるような不思議な気持ちになってしまいました。帰りに山川さんおすすめ「黒ばらさん」シリーズを2冊借りることにしました。「黒ばらさん」2冊を抱え、ふわふわした幸せな気持ちで文庫を後にした私は、3時間半かけてまた来た道を帰って行ったのでした。山川さん、楽しい1日をありがとうございます。

(取材日：2010年8月14日)



末吉暁子著・牧野鈴子イラスト『黒ばらさんの七つの魔法』(1991)、『黒ばらさんの魔法の旅だち』(2007)、偕成社



主宰者の山川喜美子さんと室内の様子

やまぐち しんや：沖縄国際大学



株式会社

関西総合ビル管理

代表取締役 嘉 数 茂

本 社 〒901-0241 豊見城市字豊見城707番地 TEL (098)856-6353(代)
 警備本部 〒901-0241 豊見城市字豊見城707番地 FAX (098)856-6359
 TEL (098)856-7767